

## オープンキャンパス

### 生田キャンパスに2000人

11月3、4の両日、生田キャンパスで行われたオープンキャンパスには約2000人の参加があった。

各学部の教員による個別相談や、在学生との懇談コーナー、保護者向け説明、心理学実験室ツアーなどが行われた。そろいの黄色いウエアを着た学生スタッフが、受付やスタンプラリー、懇談などを担当。受験生に「専大ライフ」をアピールした=写真。



## 2008年入試結果

### ネットワーク情報学部AO入試

志願者数は102人(前年度117人)で1次選考(書類審査)合格者は70人(同79人)。第2次選考(面接)で37人(同49人)が合格となった。

### 法科大学院入学者選抜試験

志願者数は624人(未修者329人、既修者295人)で第1次選抜合格者数は154人(同53人、同101人)。第2次選抜(最終)合格者数は95人(同30人、同65人)。

## 「健康フラッシュ」

### なぜ？ それとも…

「心がかぜをひく」ってことばを聞いたことがありますか？ 疲れがたまって頭がフリーズしちゃったとき。友達とうまくいなくてすべてがイヤになったとき。ほんのちょっとした原因から、心がかぜをひきます。十分に健康なときは、そのまま放置してもかぜは治ります。でも、かぜは万病の元。気をつけなければいけません。

いったい何に気をつければ良いのでしょうか。

まずは睡眠。寝つきが悪い、夜中に2回も3回も目覚める、夢をたくさんみているようで寝た気がしない、などなど、それまでの睡眠と質・量が違った状態が1週間以上続いたら要注意。ちょっとかぜをひいたかもしれません。

あるいは食欲。妙に食欲があつたり、逆に食欲がなかつたり。これも1週間以上続くようなら要注意です。

では、どう対処したら良いのでしょうか。

まずはなんといっても休養です。その最大のもは睡眠です。大の字にあおむけになって、深呼吸しながらゆっくりと手足が温くなるようにイメージします。それを何回か繰り返し、徐々に興奮したからだを睡眠につなげます。

次に重要なのは気分転換。帰宅時にちょっと寄り道をして気分を変えとか、映画・音楽にふれるのも良いでしょう。

ところが、こういった対処をしても一向に回復しなかったら…。

それは残念ながら心のかぜです。どうぞ保健室にいらっしやいませ。

(保健室)

## 課題解決型インターンシップ

### 柿生商店会・中学生と「禅寺丸柿」をPR

キャリアデザインセンターの課題解決型インターンシップで5人の学生が、川崎市麻生区の名産で日本最古の甘柿をPRする「禅寺丸柿まつり」(10月21日)を盛り上げる企画に携わった。商店会の活性化を目指す柿生中央商店会(野村衛会長)からの「若い世代に『禅寺丸柿』の価値を伝えるためのアイデアを」という依頼に協力したものだ。

参加したのは、籠島大祐さん(経済4)を中心に恩田浩司さん(経済3)、古田修一さん(商3)、濱田政吾さん(経営2)、佐藤雄仁さん(同)。6月から商店会幹部と話し合いを進め、「地域を担っていく若い世代＝小中学生＝をターゲットに」と企画がまとまる中で、柿生中学の生徒5人がさらにインターンシップに加わった。企画会議を重ね、柿をイメージした店舗デザインや詰め放題などのアイデアを出し合った。学生たちは、キャラクター募集のために七つの小中学校を直接訪れ、協力を依頼。1000件もの応募があった。

前日に収穫した2000個の柿は、午前中で見事に完売。午後から行われたキャラクターコンクール表彰式で、最優秀賞の野口萌香さん(小4)らに賞状と記念品が贈られ、例年以上に盛り上がった柿まつりは無事終了した。

「普段、接点のない方々との出会いはたいへん楽しく、多くのことを経験した」と籠島さん。「商店会の80歳近い方から、『今年で最後にしようと思っていたが、楽しかったので来年も頑張るよ』と言われ、涙が出るほどうれしかった」と恩田さん。「『企画・運営』に実際に携わって、それが自分に合っていることが改めてわかり、今回の経験が自己分析になった」と古田さん。「今度は企業でのインターンシップに挑戦したい」と佐藤さん。「考えを伝えることがこれほど難しいとは思わなかった。来年から始まるゼミでコミュニケーション能力を高めたい」と濱田さん。「自分たちの街を盛り上げようとする幅広い世代の熱い思いに感動した」と振り返る5人はそれぞれ、次のステージへの道を見つけたようだ。

「オレゴン大学に中期留学してから、いろいろなことにチャレンジしたくなった」という恩田さんのように、キャンパスには自分を変えるチャンスがたくさん用意されている。自分に合うものを見つけ、チャレンジしてみよう。



▲一緒にまつりを盛り上げた皆さんと



▲午前中で2000個の柿は完売

## セクシュアル・ハラスメント防止委員会研修会

### 両性の働く権利拡充を

数々の女性差別是正裁判にかかわった今野久子弁護士を講師に迎え、セクシュアル・ハラスメント防止委員会(委員長=内山哲朗経済学部教授)主催の研修会「職場とジェンダー…差別をなくすリレー…」が11月6日、生田キャンパスで開かれた=写真。

「21世紀は、女性も男性も家庭と仕事の両立を目指す時代」と切り出した今野弁護士は、日本の職場環境が強固なジェンダー構造の上に成り立ち、男女間の格差が拡大されてきた経緯を説明した。そして、ジェンダーの視点から、困難な状況の中で異議を唱え、裁判に立ち上がった女性たちが何を問題にし、何を求め、何を变えていったのか、具体的な事例を紹介した。

職場では、男女が相互に人格を尊重し、対等な働き手であるという視点に立って、雇用をめぐる制度や仕組みが男女に平等に開かれているかどうかをチェックしてほしいと強調し、最後に「差別をなくすリレー」とは、裁判勝訴が「終わりではなく」「働く権利拡充のため」の始まりであり、「次の世代にも闘い続けてほしい」というメッセージであると結んだ。

## セクシュアル・ハラスメント防止委員会から

### 向き合うことの大切さ

学生と面談をしていると、「先生、話聞いてますか」と言われることがたまにあります。次にすべきことを考えていて、うわの空で耳だけ傾けているのが見透かされているのです。また、突然鳴り響く携帯電話の呼び出し音とともに飛び出して行った学生が、しばらくして何事もなかったかのような顔をして戻ってくる場合があります。すかさず、「人と会うときは携帯電話の電源を切ってくるのがマナーだよ」と穏やかに注意するようにしていますが、なかなかなくなることはありません。

このように、別のことを考えながら相手の話を聞く事例と、いつかかってくるかもしれない携帯を気にしながら人と会う事例は、一見すると無関係に思えるかもしれませんが、しかしながら、「目の前にいる相手と真剣に向き合っていない」という一点においては共通

する部分があるのではないのでしょうか。

セクシュアル・ハラスメントに限らず、およそハラスメントが発生する土壌には、きちんと相手と向き合おうとしない姿勢が隠れていると考えています。相手の発言はおろか、表情やしぐさにも十分気を配らず、さらに、最近はやりのことばで言えば、相手が発する空気さえも読もうとしない態度が相手に対する無理解や誤解をうみ、ひいては、勝手な偏見を抱く事態にいたり、嫌がらせや差別へとつながっていくのではないかと思います。

言い換えれば、誰もが今この瞬間に向き合っている相手のことを少しでもきちんと理解しようとするれば、それだけでも状況は変わってくるかもしれません。何かとあわただしいこの時代だからこそ、お互い真摯(しんし)に向き合うことの大切さを、自戒の念をこめて再確認したいものです。

(中村太一)

## 多摩区民祭に参加

### 短大の「新じゃが」配布大好評

生田緑地を会場に10月20日に行われた多摩区民祭に今年も本学が参加。多摩区3大学の明治大学、日本女子大学とともにさまざまなイベントを行い、区民を楽しませた。本学は、大学紹介ブースを設置したほか、吹奏楽研究会、ダンスチームMISAKI、ギター同好会、全学応援団の学生が日ごろの練習成果を披露した=写真。

また、今年は専修大学北海道短期大学内の専大ファームから届けられた、無農薬有機栽培の「新じゃが」200キログラムを来場者に無料配布した。用意した300袋の「新じゃが」は1時間ほどですべてなくなり、人気の高さがうかがえた。



## 学生部主催

## 手話講習会

学生部主催の手話講習会が、9月28日から12月7日まで毎週金曜日に行われ、15人が熱心に取り組んでいる＝写真。

